

ロシアのウクライナ侵略

第二次世界大戦下の日本を重ね考える

「ウクライナには米国主導の生物兵器研究所がある」。数年前からSNSなどで繰り返し流され、「ばかっている陰謀論」と米欧諸国が明確に否定してきた。また明らかに、民間人を狙った病院や学校に対する「ミサイル攻撃」などの残虐な行為をウクライナ自らが仕組んだものとする情報が繰り返し流されている。それだけではない。国連という公的な場でも、ロシアの大使は「ロシアは民間人を殺傷する攻撃は一切行っていない」などの発言を繰り返している。戦争にはつきもの「これら「偽情報」であるが、私たち日本国民も同様な過ちを経験していなかったか、そのことを振り返ってみたいと思う。

1941年12月8日、日本とアメリカは4年近くに及ぶ戦争へと突入した。「大本営発表」の真珠湾攻撃である。私は5歳であった。そのとき「何か大変なことが起きたような、それでいて雰囲気は悲しいものではなく、勇ましく、明るいものであった」ことを覚えている。また、中国大陸に進出をした日本軍の勝利を信じる私たちは、世界地図に「朱色」に染め、日本国土の拡大を誇らしく思っ

いた。しかし、そこで何が起きていたかは知ることはなかった。いわゆる「大本営情報」に操られていたのだ。そしてその時代が「軍国少年」を生み、私もその一人であり、敗戦の年までの3年間軍国少年であり続けた事実を語らなければならぬ。「一億玉砕」、「全国民火の玉一丸」となって「鬼畜米英を倒す」。そして最期は「神風」が吹き太平洋に浮かぶ米戦艦は海に沈み、「無敵艦隊」が出撃し日本は勝利するということを疑わなかった。

町内には官主導の「隣組」が形成をされていた。それは戦争総動員体制を具体化したものであり、軍の方針を伝える組織であり、同時に「相互監視」を目的とするものでもあった。当時「5級スーパージョ」を持つている人はまれであった。そのラジオでは外国のニュースや音楽を聴くことができた。しかし、それが通報的となり検挙される。つまり「スパイ」の嫌疑である。またその延長に国防婦人会の存在がある。割烹着に白タスキ、出征兵士の見送りや慰問袋の作成、果ては「竹やり部隊」、「防火訓練」などなど。そしてこれらへの参加、不参加による「選別」は「戦争総動員体制」の具体化を強めた。いわゆる「大政翼賛体制」である。

著名な随筆家の一人である「岡部伊都子」は戦後次のようなことを激白している。(岡部の随筆を愛読していた落合恵子と佐高信は『岡部伊都子集』の編著となっている)「私は婚約者を沖繩戦で亡くしたが、『こんな戦争で死にたくない』という彼を

『私やつたら喜んで死ぬけど』といって戦場に送り出したという経験を述べ、戦後自らを「加害の女」と断じた。「みんなは自分は被害者だと思っている。だけど戦争に行く人を、旗を振って送り出したんです。戦争に反対する人たちを『反戦者』として訴えてきました。(私は)戦争に加担したんです」と。

また作家、田辺聖子は「軍門に降るという習慣を持たない日本人が、執るべき道は、勝利か、死か過ぎない。勝利はもはや遠くの方に去り、死のみが残された」と戦争末期の状況を冷静に綴っている。「田辺聖子18歳の日記」

2021年7月号文芸春秋より。

私の連隊である戦車第一連隊は、戦争の末期に満州から連隊ごと帰ってきて、東京湾や相模湾に敵が上陸すれば出撃する任務をもたされていた。

「もし敵が上陸したとして、われわれが急ぎ南下する、そこへ東京市民が大八車に家財を積んで逃げてくる。途中交通が混雑する。この場合はどうすればよろしいのでありますか」と質問すると、大本営からきた少佐参謀は「軍の作戦が先行する。国家のためである。ひつ殺してゆけ」といった。

(司馬遼太郎氏著『歴史の中の日本』より)

七月参議院選挙・東北から反自民の戦いを

そのためにも東北ブロック一議席の確保を!!

■全国比例は「社民党東北ブロック候補」

「久保 孝喜」(くぼこうき)

■福島県選挙区は、野党共闘候補

「小野寺彰子」(おのでらあきこ)

【「たひんじや」】

気づいたこと、感じたこと PCR検査を受けて考えたこと!!

前々日の夕方から発熱。当初は7度8分であったが8度8分まで上昇。頭を冷やしながら朝を迎えようやく7度2分まで下がった。当日は外来予定日であり、発熱の旨を連絡したところ、当院の「発熱外来で検査を受け、結果が『陰性』であれば診察窓口にお出で下さい」とのことであった。

しかし今は免許返納の身、「足」はタクシーのみである。公衆衛生からしての「社会的責任」が配車の依頼をためらった。しかし病院までは3キロ半、迷いながらも配車をお願いした。

通された発熱外来の部屋は3坪程度の個室。真ん中にパイプ椅子と荷物籠があるのみ。「PCR検査」の結果が出るまでの1時間半は長かった。その間、幾人もが検査のために来院してきた。声が聞える。特に多かったのが子どもである。「痛い、嫌だ」と泣き叫ぶ声を聞き、「こどもも子どもへの感染の広がりを感じた。結果は陰性そして外来診察へ。初体験のひと時であった。そして考えた。もし「陽性」であつたらと。待ち時間の中で、福島県の「新型コロナウイルス感染症のしおり」の記憶をたどっていた。

入院の可否の判断は誰が、どこでするのか

しおりには、「陽性が判明した場合、入院するかどうかは 陽性者の年齢、症状、重症化リスクなどにより、医療機関の医師や保健所が判断をする」

- 2 -
ととなっている。

【疑問】

2020年2月以降、ウイルスは全国にひろがった。当初陽性者は「入院治療・療養」を原則としていた。しかし医療ひっ迫、あるいは感染者の容態などの要因もあり、いつの間にか「自宅療養」に比重が置かれていった。そこでその判断に「家族関係・居住状況」がどれだけ加味されているのかということがある。高齢者の多くは「老々世帯」である。二人合わせた協力によって生活が成り立っている。そして住宅状態もある。その実態の中で「健康状態の確認」や「訪問看護」がどれだけ確保されるだろうか。「電話が通じない、そして待たされる」。「急変した。救急車を呼ぶが来ない。来ても救急病院が見つからない」「自宅の中で死亡」。あるいは食料品など生活用品の支援があるが、それも遅れるということが全国から報じられている。

福島県の「宿泊療養施設」の実態は

4月11日現在、福島県の宿泊施設は1356まで増設されている。また、今までの入所者の過去最多は570人と報じられている。

宿泊療養のしおりによると、1施設ごと24時間体制の「生活支援員」が配置され日常的な支援が行われる。さらに看護師2名の配置(9時から17時まで)により、館内通話による健康管理や相談事が確保されている。同時に24時間オンコールの医師の体制もひかれている。「自宅療養」より、「宿泊療養」がより安全、安心の管理体制にあると考えてよい。しかし、その「宿泊療養」が増えず、今もつて「自宅療養」が多い事実をどう見ればよいのか。

仮に、行政(保健所)が宿泊を規制しているとするならその理由を明らかにしなければならない。

しかも福島県内の場合宿泊施設に余裕がある。私は宿泊療養の選択し、その実現するまでの取り組みの中で実態を明らかにしたいと決意した。

子どもの生活の場の「クラスター発生」が65%

3月16日付けの厚生労働省事務連絡により濃厚接触者の取扱いが変更された。その内容は「マスクなし、1メートル以内、15分以上」の接触の中で「陽性者」が判明をした場合、その対象内にあつた者全員を「濃厚接触者」とみなすというものである。郡山保健所は2月、市内の陽性者の感染源を調査した。その結果は「家族内感染43%」、「学校、児童施設内感染18%」である。また、クラスターの分類を見れば「教育現場28%」、「児童施設37%」と、合計で65%という驚異の数字が報告されている。給食時間は当然にしてマスクなしである。そして15分以内で済みますということが児童に与えるだろうストレスは大きいだろう。対策は「密」な生活を防ぐというが、それは給食時間に限つたものではない。アクリル板による遮蔽もあるだろう。「ウイルス清浄機」の設置を急ぐべきである。さらに工夫と努力が教育現場に求めたいと思うが、今の教育現場の実情は多忙そのものである。そうであれば「市民(保護者)と議会」が一体となつた『コロナから子どもの命をまもる市民の会』などの結成が必要であると考えたい。

県は16日から子どもの感染対策に重点を置く新たな方針を呼びかけていくという。「子どもの不

織布マスク着用、会食時の人数を一つのテーブルで4人以内とする」などを求めているが、福島県独自の重点対策がさらに必要ではないか。

以上が、3坪の空間の中で過ごした1時間半の体験から得た私の報告である。(降矢記)

住宅火災で亡くなる方の4割は

一酸化炭素中毒・そして高齢者が多い

住宅火災は、その多くが「高齢者の死亡」ということが同時に報じられている昨今の火災である。

火事で恐ろしいのは、火炎より『煙』である。火災で亡くなる原因をみても、煙による一酸化炭素中毒や窒息が原因で命を落とすことが多い。

一つの実験現場での報告がある。8畳間程度の部屋でドアが一つと一間の窓ガラスが一枚。このことを確認し発煙筒に発火。1分間で部屋は煙に包まれる。そしてきちんと確認したはずのドアと窓ガラスの位置がわからない。慌てれば、あわてるほど。パニックとなった。これが無害の煙だから良い。

◆ 煙が拡散する時、上に昇る煙の速さは1秒で約3〜5m(かけ足の速さ)である。横へ拡がる速さ1秒で約0.3〜0.8m(歩く早さ)と言われている。あつという間に部屋は煙で充満となる。

◆ 煙には一酸化炭素など有毒なガスが多く含まれている。火災によって亡くなられた方のほとんどは、火焰より煙を吸い込み一酸化炭素中毒により意識を失い亡くなっている。

◆ まず煙は天井に溜まることを覚えておこう。よって床近くの空気の層は、比較的煙が薄く空気が残っている。また視界も良い。よって姿勢を低くして

避難する。

◆ 同時に濡れたハンカチやタオル、無ければ、手元のタオルや衣類でも良い。それを鼻や口に当てて避難することを忘れずに。大きな非ビニール袋があればそれを被るのも良い。

「力強く生きよ」・小さな芽の生存力に学ぶ

2025年には、団塊世代が75歳以上となり、5人に1人が後期高齢者となる。さらに4年後には「老塊の世代」となってしまうだろう。

幸いにして平均寿命を超えた身、「後は何があっても不思議ではない」という強気を示すが、自分の意志では動くことができなくなることは確かである。「老々世帯」であれば、合わせて手と足が8本、協力をして何とかやっつけていくことができるだろう。しかし

確実に6本以下になることは間違いない。しかも、「独居」の生活もある。そこに介護という仕組みにお世話になる。

ある日散歩道で舗装の割れ目から顔をのぞかしている小さな芽を見つけた。

これからの暑い日差しの中で枯れていくかもしれないし、負けずに芽を伸ばしきるかもしれない。

そしてマルチン・ルターという言葉を出す。「たとえ明日世界が滅亡しようとも、今日私はリンゴの木を植える」。それは明日への希望を信じ、そこに生きることを求め続ける、熱烈なメッセージである



と受け止めたい。「強く、生きよ」。それを私たちが高齢者の「共有」の財産として、これからの晩年を過ごしたいものである。

報告・提言のひろば



■ 参院選に向けて、3年前と同じ轍を踏もうとする立憲民主党に失望しています。どうしたら憲法を守るのか、9条を持ち、唯一の被爆国である日本がなすべきことを見失っている政権を倒すことができるのか、日々忸怩たる思いです。

■ 全世界がウクライナに集中していることに注目しています。それは、日本の政治が世界各国と比べいかに緊張感に欠けているかが注目されるからです。ウクライナに支援だけをしていけばよいのでしょうか。そもそもこの戦争に至った経過を見れば、ロシアの一方的な主張は絶対に認められないことをもつと強く、明確に、そして責任を強く非難すべきでしょう。ロシアという大国がいかなる理由がある一方向的に戦争を仕掛けたことと責任を追究し、可能な限りの制裁を世界各国と共に追及すべきではないでしょうか。もし、岸田政権が北方領土返還に支障がきたさないようにとの思いが少しでもあるのだとしたら、とんだ勘違いではないでしょうか。ロシア(プーチン)には「元から北方4島の返還などの気はない」のだからです。岸田政権が少しでもロシアに配慮する姿勢を見せれば、世界中の笑い

ものになるでしょう。私たちは、「絶対平和」を追求することが使命であり、次の世代に対しての責任でもあると思うのです。一日も早くウクライナ戦争が終結することを祈り、最大限の支援を国民運動として取り組まなければと思います。どんな小さなことでも反戦につながることを続けましょう。今週末もウクライナ支援を訴える街頭宣伝とカンパに取り組みます。

■相変わらずのコロナで出歩く事もままならず、ストレスも感じますがやむなしです。また種々の集まりも制限されています。郡山市の感染者が多いですね。人口と活気のせいでしょうか。アメリカがマスクの解除を、法的に決めたとありますが良く解りません、中国上海のロックアウトも如何なものかと疑問を持ちます。連日のウクライナ問題は理解しにくいものがありますが、ロシアの蛮行プーチンと中国の習近平に何か似通ったものを感じます。二人ともイデオロギーが成せる事なのでしょうか。

「北方四島」の例もあります。何を言ってもダメな様に感じてしまいます。イデオロギーは怖いのです。■わたしたちは、ある意味で終末を生き延びていると感じています。気象変動、地震などの自然災害、そして戦争です。人間がメチャクチャをしている結果です。私も含めて、人の愚かさを深く反省しています。その原点に立つて、平和で自由な社会、そして正義が行われる世の中の実現を目指したいと考えています。

■ウクライナの問題を通じて、大政翼賛状態になっています。

■4月24日、お隣の臼杵市議選の投開票がありました。同地区で平和運動センターの同センター系の候補4名が立候補し3名の当選で、まずまずの成果でほつとしています。定数は18名で21名が立候補。テレビで有名になった「マスク拒否市議」は最下位で落選しました。「非軍事の努力で脅威を除け」の高橋哲哉教授のお言葉はその通りです。社会党時代の石橋委員長が「非武装中立論」を主張していましたが、同じだと思えます。憲法改正、核共有論、防衛費2%などウクライナを利用した右傾化を止めなければなりません。参院選も大変です。

■ここ2年以上は、用事がなければ仙台へ帰省することもなくなりました。ただ、どうしても帰らなければならぬ用事があり、先週、連休前に事前に抗原検査で陰性を確認した上で行ってきました。検査などしなくとも、早く自由に行き来できるようになればと願うばかりです。今日は憲法記念日で、3年ぶりに有明で開催された憲法集会へデモに参加してきました。会場には東京のいくつかの支部の社民党ののぼり旗がありましたし、福島党首がスピーチに登壇されていました。福島党首も指摘されていました。集会では、ロシアのウクライナ

侵略を機に改憲論議を進めようとする動きに対する危機感を強く意識する空気がありました。9条の改訂、自衛隊の明記、緊急事態条項、軍事費倍増、核シエラなど、ウクライナ侵略を背景に国民に働きかけようという動きが強まっており、一部世論調査でも、その空気が広まっている数字が出て

います。エネルギー問題からは脱原発に対する巻き戻しの動きも出てくるのが予想されます。残念ながらウクライナ危機は、来る参院選で野党側にとつては逆風になると感じざるを得ません。二ユース5月号の冒頭記事の高橋哲哉東大名誉教授のご指摘の通り、ウクライナ危機から学ぶべきことは多いのだと思います。当面の逆風はそれとして、事実は何かを、冷静に見極めることができるようにしたいと思えます。

■今年の7月はいよいよ参議院選挙が行われます。1月に開催をされた、社民党の熊本県連合の旗開き2年ぶりに夫婦で参加をしました。70名ほどの方が参加をされていました。熊本に帰って15年が過ぎましたので数名の方とも話が弾むようになりました。招待をされた組合の代表を除けばほとんどの方が私と同じ年代です。私たち「鉄の仲間」(鉄鋼労連)が職場の後継者づくりにのぞんだように、高齢者組織づくりに専念することをあらためて実感しました。「若い人の要求を聞き取り、若い仲間を指揮して社民党を守り抜こう」のガンバルー三唱をで閉会となりました。重たい宿題に腰が伸びるのか、へし折れるのか。…………。人生最後の峠道に差し掛かった思いです。



【お礼】

県外のニユース読者より過分なる切手の送付がありました。カンパとして頂戴いたします。ありがとうございます。

(事務局)